



コメ勉が訊く! 聴く! 効く!

インタビュー from 「コメダde勉強会&相談会」
Powered by 澤田かおる行政書士事務所 (☎072-488-7304)

放課後等デイサービス「ぽけっと」の スタッフの皆さんにお話を伺いました。



(平成28年7月9日取材)

私たち「コメダde勉強会&相談会」は、勉強会の準備のために、とても詳しく取材をします。ですから、このような形で、取材そのものを記事にして、「訊く! 聴く! 効く!」をコンセプトに、様々な情報をみなさんへお届けし、皆さんの暮らしが豊かになればと思っています。

(澤田)
子育て中の行政書士、澤田郁です。
子育てをしていると、自分だけではままならないことや、いろいろな悩みがあり、だからこそ、いろいろな方のサポートが必要だと感じています。
私もたくさんの方に助けていただきました。
それでも、まだまだあまり知られていないサポートはたくさんありますし、そんなサポートについて、もっと広くみなさんに知っていただきたいと思っています。
例えば、「放課後等デイサービス」という施設があります。
これは、障害を持ったお子さんたちが、放課後や休日を過ごす場所であり、「障害児の学童保育」とも呼ばれる施設です。
家でも学校でもない場所で、遊んだり、自立のための訓練をしたりして過ごす時間は、お子さん本人にとっても、またご家族にとっても、とても貴重なものだと思います。

今回は、岸和田市の**放課後等デイサービス「ぼけっと」**さんにお邪魔し、代表の河野さんをはじめ、スタッフのみなさんにお話を伺いました。

私と河野さんとは、私がこのぼけっとさん開所の際の、大阪府への手続きのお手伝いをさせていただいたことがご縁で、仲良くさせていただいています。

お伺いしたこの日は、開所1周年記念パーティーの翌週のことでした。

(澤田)

河野さん、本日はよろしく申し上げます。

(ぼけっと河野さん)

こちらこそ、よろしく申し上げます。

(澤田)

ぼけっとさん開所1周年、おめでとうございます。

先日の1周年記念パーティー、参加させていただきましたが、本当に楽しかったです。

皆さんが笑顔で、ぼけっとさんの毎日はこんな感じなのかなと、垣間見たようでした。

(ぼけっと河野さん)

ありがとうございます。

パーティーは子供たちも保護者さんも、みんなが楽しんでくれて、大成功だったと思います。

(澤田)

開所のお手伝いをさせていただいたことで、こんなに楽しいパーティーに呼んでいただいて、本当に光栄なことでした。

(ぼけっと河野さん)

ありがとうございます。

澤田先生のおかげです。

来賓代表スピーチありがとうございました。



——放課後等デイサービス「ぼけっと」さんとは

(澤田)

パーティー後、何か変化はありましたか？

(ぼけっと河野さん)

お母さんたちから、

「(スタッフそれぞれに)親近感がわいた」

「(スタッフと)プライベートの話ができるようになった」

という言葉が聞けるようになり、スタッフが嬉しく思っています。

スタッフそれぞれが人として好きになってもらいたい、スタッフそれぞれにファンが必要と思っていますので、パーティーを通じてスタッフそれぞれのことを知ってもらえて、とても良かったと思っています。

なのでスタッフの士気も上がっています。

これが個人が続けていく、発展するきっかけだと思っています。



(澤田)
スタッフさんは何人いらっしゃるのですか？

(ぼけっと河野さん)

自分を含めて9人です。
常勤が5人、非常勤が4人です。
自分が代表で、岡本さんが現場トップ、椿さんが経営の窓口という役割です。
(※インタビュー2人目が岡本さん、インタビュー3人目が椿さん)

(澤田)
河野さんはプレイングマネージャーというわけですか？

(ぼけっと河野さん)

現場の指揮と、経営の指揮とがありますね。
自分は現場から離れようと思っていて、そうじゃないと発展がないからです。
自分の言うとおりにスタッフが動くのではなく、スタッフみんなで会社を支えて、大きくしてほしいと思っています。
みんながいろんなこと気付いたり、改善したり、失敗したりしないと、組織としての成長が無いのです。
自分はなるべく意見しなかったり、なるべく一緒に活動しなかったりというのを意識しています。
自分が現場に出ないことで現場は1人分しんどいですが、それは岡本さんに全部任せてやってきました。



(澤田)
では、普段のぼけっとさんについてお訊きします。
普段はどのような活動、過ごし方をしているのでしょうか？

(ぼけっと河野さん)

平日は学校終わった午後から子供たちがやってきます。
なるべく外に遊びに行きます。
近場の公園とかですね。
室内メインの事業所さんもいて、例えばiPadでYouTube見たり、ゲームしたりとかもありませんが、それは家でできることなので、わざわざ放課後デイでする必要はないと思っています。
ぼけっとは、集団の活動をメインに、みんなで公園に行って遊ぶことを大事にしています。

(澤田)
一般的にですが、事故を恐れて屋外活動が消極的になってしまうことが多いかと思うのですが、そのあたりいかがでしょうか。
オープンの前でしたか、確か北大阪のほうで大きな事故もありましたし。

(ぼけっと河野さん)

そこを一步踏み込んだ時に、普段見ないような姿や表情が表れて、その体験が成長につながると思っています。
そこに対しての理解をご家族に求めて、力を注いで、一步引きそうな活動を踏み込んでやりたいのです。
それが「**自立支援と社会参加**」という、ぼけっとの行動理念に繋がるからです。
心配だから何事も起きないように引きがちになるのじゃなく、一步踏み込む、そこが楽しいはずと思って活動しています。



(澤田)
なるほど。
あの標語はそういう意味なのですね。

——普段のぼけっとさん

(澤田)

普段の活動の様子は、この月間広報誌「ぼけっとタイムズ」でお知らせしてるのですね。

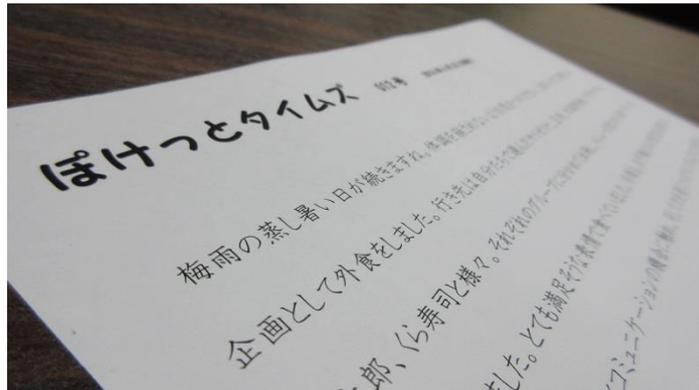
(ぼけっと河野さん)

保護者さん向けにお配りして、ぼけっとの活動について知ってもらっています。

(澤田)

では「ぼけっとタイムズ」を見ながら、この1年について振り返ってみたいと思います。

オープンしてすぐに夏休みでしたね？



(ぼけっと河野さん)

オープン直後は、活動しながらおもちゃなどを揃えました。

8月はプールや室外での活動が盛りだくさんでした。

9月は野外炊飯、カレーと焼きそばを作りました。

外での活動ということで、火を使う活動をしました。

10月は芋堀り・大根堀りなど。

岸和田市に、一般の方も利用できる芋ほりの施設というか畑があって、そこに行きました。

あまり知られていませんが、岸和田には社会資源がたくさんあるので、次回はおうちで行こうとか、友達増やして行ってみようか、という拡がりになればいいなと思って、いろんな機会を作っています。

(澤田)

秋以降は少し活動の趣きが変わってきていますよね。

(ぼけっと河野さん)

はい。

11月は今までとは違って、自立課題の導入をしました。

自閉症の人は、フリーな時間が苦手だったり、何をやる時間なのかがわからなくて不安だったりするので、座って取り組む課題を設けました。

手先の訓練、集中力の訓練という、就職の機会にも繋がるような、ある程度着席して課題に取り組む、という意識で取り入れました。

活動のメリハリですね。

まあ、訓練も「訓練訓練」という感じではなく、当然できるようなことから取り組んで、自分ができたんだという自信、自分ができる、自己肯定感、自分を好きになったり自信をつけたりとかのきっかけづくりということを考えています。

(澤田)

自己肯定感。

いい言葉ですね。

(ぼけっと河野さん)

理念の「自立支援と社会参加」のうち、「自立支援」を促す大切な部分です。

自己肯定感、つまり自己評価が高くないと、受け身になってしまったり、自分のしたいことができなったり、フラストレーションが溜まって、それが良くない行動に繋がると思うのです。

自信があって、これだけしときたいと思ったら、それだけをして、生き生きと生きていける人生があると思います。

だからいつも、「自信つけよう」と言ってます。



(澤田)

だからぼけっとの皆さんは、いつも「いいね～」という言葉をかけているんですね

(ぼけっと河野さん)

注意されている機会がすごく多いと、失敗することが嫌になってくるはず。

だからぼけっとは、怒らないし、注意しないです。

めっちゃ子供らのこと褒めてると思います。

だから「いいね～」と言います。

でも、悪いことしたら、当たり前ですが怒らないといけません。

悪いことしないような手立てを、自分たちが先回りして作るようにしています。

(澤田)

それってどうするんですか？

日々のアンテナ張り具合ですか？

(ぼけっと河野さん)

そうですね。

先に、このままだったら駄目だからこっちにしとくか、という気付きを先に意識しています。

ケンカしそうだなぁと思ったら、間にさりげなく入って会話を繋いだりして、そしたらケンカなくて済む、ということです。

なので、当たり前のようにうまく行っているとき、なんにも起きていないときこそ、スタッフはよく見れている、頑張れている、と自分は思います。

何か起きてから止めているときは、良くないなあと思います。

まずそうならないようにせねば。



(澤田)

12月はクリスマス会。

河野さんがサンタさんに？

(ぼけっと河野さん)

いいえ。

サンタさんからプレゼントを貰うんじゃなく、みんなでプレゼント交換をしました。

自分が欲しいおもちゃを買うんじゃなく、人に対して何かをあげる、相手のこと考えて行動する、ということがすごく大事なことで、こんなもらったら嬉しいかなとか、人に対する意識・気持ちを大事にした行事でした。

「自立支援と社会参加」の、「**社会参加**」を促す部分です。

(澤田)

私の率直な感想として、河野さんは、とても先の先まで見据えて、お仕事をなさっていると感じます。

(ぼけっと河野さん)

そんなに先の先までは、そんなことないと思いますけど。

でも、順番やタイミングは意識しています。

なので、オープンから半年過ぎた2月の、このタイミングで職員向け研修会を行いました。

未経験のスタッフも半分くらいいてここまでやってきたのですが、自分としてはこの順番のほうが良いと思っていました。

まず知識詰め込んで、その知識の「当て嵌め」で子供たちを見ると、頭でっかちになってしまうと思うのです。

まず子供たちと直に接して、無知なまま接して、不自由なこと難しいことを肌で感じ取ってもらってから、そこで初めて本を開くと、こんなケースあったな、あのケースのヒントが載ってるな、と言う気付きを得ることができるので、それからのほうが、知識の植え付けが根強いと思ったのです。

この順番でいいと思っています。

実際、今までの自分がそうだったですし。

目の前の子供のほうが、生々しいというか、そこに合わせていく、実体験が最初にあって、ということです。

まず知識・研修でなく、実際に入って行って、それが先ということです。

(澤田)
4月はバーベキュー。

(ぼけっと河野さん)

予報は雨で、雨天中止の予定で、当日も少し雨が降っていて、みんな保護者さんもスタッフも中止と思っていましたが、自分はやろうと思っていて、やるぞ！と決行しました。施設は屋根もあるし、野原で遊ばなくてもバーベキューはできると思ったのと、保護者さんが初めて参加するイベントだったので、絶対やりたかったんです。そうしたら実際は凄く晴れて広場も遊べました。この時はいい判断出来たと思いましたね。



(澤田)
自己評価、かなり高いですね(笑)。

(ぼけっと河野さん)

基本的に自己評価高いです(笑)。

(澤田)
5月は、こどもの日カラオケ。
写真を見ると、これは……カラオケボックスに行ったのですか？

(ぼけっと河野さん)

行きました。
こんな福祉事業所でカラオケボックスなんて行っていいの？ と思っていましたが、普通に遊ぼう、子供の日だし、今までにないイベントしよう、ということで行きました。
実際、すごく盛り上がりました。
こちらがルールを2つ設定しました。
(1) 楽しむこと
(2) お友達が歌い終わった時に拍手すること
このルールをちゃんと守って、しかもカラオケボックスの利用の仕方もすごくしっかりしていて、すごくみんなお行儀良くて。完ぺきでした。
良い体験だったと思います。
こちらが構えすぎないほうがいいんじゃないかな、と気付かされた一日でした。

(澤田)
6月は外食ランチとありますが？

(ぼけっと河野さん)

外に食事に行くというのは、家でもやっていると思いますけど、行くお店や頼むメニュー、そこから子供たちに考えてもらうことにしました。
それに、友達と食事に行く機会も少ないだろう、ということで、外食ランチに行くことになりました。
お店の候補を複数出した中で、みんなで話し合っ、6か所に決めました。
くら寿司やマクドナルドも人気でしたが、ちゃんとした焼肉屋さんに行きたいと言ってちゃんと行った子もいました。
ほんとに生活自立を目指してるので、たくさんの候補がある中ですり合わせて、話し合っ、6か所に決めたというのも、ご飯を食べる力がついたというのも、すごく大きいことでした。

(澤田)
まさしく「**自立支援と社会参加**」ですね。

(ぼけっと河野さん)

まさしく「**自立支援と社会参加**」です。
それこそがぼけっとの理念です。

(ぼけっと河野さん)

それと、この外食ランチには、スタッフも一緒について行ったんですけど、このあたりから、スタッフも1年経って、活動を楽しみながら自分も成長する、というのが出来はじめてきたかな、と思いました。

その点でも、この外食ランチは、得るものが多かったですね。

(澤田)

そして、皆さん印象に残っているという、登山ですね。

(ぼけっと河野さん)

二上山へ行きましたが、まあまあの道のりだし、角度も急で、完全に登山でした。

ハイキングとかでなく、完全に登山でした。

下見の時に、子供ら大丈夫かな～、と心配になり、別の山も登りましたが、こちらはロープウェーで登って、頂上まで10分歩くとかいう山だったんです。

こっちこそ完全にハイキングでした。

どっちの山に登る？

ハイキングにしてしまう？

ちゃんと登山する？

と考えた時、結局、自分の中で、チャレンジしたいな、と思って、難しいほうを選びました。

実際、難しかったです。

でも、そこで、みんなが待ったり、応援したり、協力したりがすごく

「ああ、すごいね～」

「みんなできるね～」

と思いました。

ほんと、すごく良かったです。

しかも、スタッフ側も、疲れてる中で支援しないといけない、というのが初めてで、自分との戦いも内側に隠しつつフォローする、ということが、また新しく頑張れたところだと思います。

スタッフみんな、今までにないような表情がありました。

だからみんな、頂上についたときは、すごい達成感でした。

(澤田)

ポケットさんの理念である、

「自立支援」

「社会参加」

そして、

「自己肯定感」

全てを体感できたということですね。

(ぼけっと河野さん)

だからこそ、みんな、一番の思い出に挙げているのだと思います。

(澤田)

そして1周年記念パーティーですね。

あのパーティーとても楽しかったです。

こうして活動内容をお聴きすると、楽しい1年間を過ごしてきたのだなと思います。

パーティーで観させていただいた、1年間を振り返ったスライド写真、とても良かったです。

(ぼけっと河野さん)

あれ自分で作りながら、そしてあれ観ながら、1年間を振り返りながら、かなりウルウルしていました。



——ぼけっとさんの裏事情

(澤田)

非常に中身の詰まった一年間だと思いましたが、その中で大失敗したこと、何かありましたか？

(ぼけっと河野さん)

大失敗????

いや、大失敗はないと思います。

1年間無事故で終わりました。

これはみんなすごく自信に繋がったと思っています。

常々安全第一と思っていますし、不注意でケガさせたとかはないです。

その点、クレームとか、苦情とか、意見とか、というのも保護者さんから頂いていないです。

遊んで楽しかったけど、ケガして帰ったら楽しくないですから、ふざけながらも安全は気にしていました。



(澤田)

では、経営者としての失敗はどうでしょう？

経営がつまづいた時期はありましたか？

(ぼけっと河野さん)

それは序盤本当に難しくて、2か月間収入ない中でスタートしましたので、思い出したくないくらいです。

どんどん切迫して行って、会社の通帳なのに、残高が高校生並みで、お年玉でももうちょっと入ってるんじゃないか(笑)、みたいな感じの時もありました。

それだけ、最初2か月はきつかったです。

でも、利用者さんが入ってきやすいように、スタッフを増やしたり、積極的に活動したりと、先行投資は控えませんでした。

(澤田)

ネット広報を利用しないというのは、何かポリシーがあるのですか？

(ぼけっと河野さん)

ネットは影響力があるし、一気に広がるから、それを見たいろんな人に、同じように対応できるとは思わないのです。

利用者さんが、バス停とかで、他の一人の人に伝えてくれたら、それもきっとマッチした子に言ってくれるはずだから、それが一番良くて、それなら問題起きないと思っています。

ネットの発信力だと、いいように見えてしまって、実際来てみたら思ってたのと違うとか、そこでいい関係ができなかったら、「あそこ行ってみただけど……ちょっとね」という情報がネットに流れたら一気にアウトです。

反論の場がありませんからね。

だからスタートは苦戦しました。

すぐには利用者さん一杯にはならなかったですからね。

でも、いい人たちとお付き合いできたので、今はすごくいい、理解ある人たちばかり、理解ある子供たちばかりです。

障害の重い軽いでなく、意識が合うかどうか、フィーリングが合うかどうかです。

(澤田)

……フィーリング。

河野さんと二人三脚で開所手続をした私が訊くのもどうかと思うんですけど、7月のオープンまではどうでしたか？

(ぼけっと河野さん)

それはもう、しんどさと、不安ばかりでした。

(澤田)

えっ……。



(ぼけっと河野さん)

でも、正直なところ、澤田先生とでなければ無理だった、乗り越えられなかったと思います。これは本当にそう思います。

(澤田)

私も同じ気持ちです。

実は私も不安で不安で、どうしようもなかったんです。

でも、河野さんの、ぼけっとにかける熱い想いが伝わってきたから、私も頑張れました。

(ぼけっと河野さん)

そんなに熱く語った記憶はないんですけどね(笑)。

(澤田)

いやいや、コメダさんでの初顔合わせをした時にも、けっこう熱く語っていましたよ(笑)。

この人はビジョンのかたまりみたいなんだあ、と思いました。

開所手続中も、今やりたいこと、将来はこうしたい、そのためにはこうしたい、というのがはっきり私にも伝わってきました。

そういったビジョンは、いつも頭の中にはっきりとあるのですか？

映像が浮かぶ感じ？



(ぼけっと河野さん)

頭の中にイメージというか雰囲気があって、それをどうやって伝えよう？ と思った時に言葉になります。

例えば、今いる子たちが将来おっちゃんおばちゃんになって活動してる絵が頭の中にあって、それをしてるのは自分、みたいな。

それをしたいです、と言いたいけど、でも頭の中のそれを、他の人には見せられないから、そこで初めて言葉にする、というわけです。

ぼけっとを始めてからのほうがイメージが具体的になってきましたが、ポキャブラリーが乏しくて、上手く言葉に出来なくて、歯痒いことも多いです。

(澤田)

こうして取材させていただいて、そして文字にさせていただくことで、少しでも河野さんのお手伝いができればいいな、と思ってインタビューしています。

(ぼけっと河野さん)

ありがとうございます。

実は取材詐欺じゃないかと疑っていたので安心しました(笑)。

(澤田)

あははははは(笑)。

そうそう、河野さんはいつも、そういった冗談を言って周囲の雰囲気を和やかにしていますよね。



(ぼけっと河野さん)

本来お笑い好きな人間なので好きでやってる部分もありますが、意図的にやっている部分もあります。

スタッフ間で陰悪なムードになりそうになるのも察知して、チームワーク良くするために、自分がふざけまくっているのだと自分で思っています。

自分がトップで、岡本さん、椿さんがいて、という序列が邪魔です。

スタッフがみんな意見出さないといけないし、ずっと付き合わないといけないから、その序列を取っ払うために、誰よりもふざけています。

そういう時に雰囲気の中で話をしたら、今まで出せなかったことが出せたり、素人みたいな意見でも躊躇なく出せたり、そ

そういうのが大事だと思うんです。

とても意識してるんです。

意見が正しい間違ってるというのじゃなく、未経験の人が面白いこと言い出すかもと、というのをすごく期待しています。だからそのような、ふざけてる姿を見て、それが頼りなく見えて去っていく人もいますけど。でもこれは自分は間違っていないと思って続けています。自分の中の上司像が、こういう感じなので。

(澤田)

ご友人は、河野さんの真面目な顔をあまり見たことないと言っておられましたし、逆に我々は、真面目な顔しか見たことはありませんでした。

こういう顔の使い分けはピンポイントで意識してるのですか？

(ぼけっと河野さん)

そうですね。

保護者さんの前でそこまでふざける必要ないのかもしれませんが、ふざけることで意見が言いやすいのではないかと、思って、意図的にこういう対応をしています。

保護者さんが不満に思っている、それを言い出せないまま、次に何か大ごとがあって、後でまとめて意見が押し寄せてきた時に、対応できないと思うのです。

ですから、最初から解放的な事業所運営を目指しています。

幸い事故は起きていませんが、そして事故は起きないにことたことはありませんが、もし起きてしまった事故を、事件にしないためにも、「ちゃんと見てたのか？」と言われて事故が事件になってしまうのは、絶対に防がないといけません。

関係者がちゃんとしてたら事故で済んだのに、今度また同じことをチャレンジできたのに、事件になってしまって、その結果スタッフが傷ついて、やめていく、という負のサイクルに繋がっていく、というのは避けられることですし、避けなければならないと思っています。

なので、誰からも嫌なことをいっぱい言われるような人になろう、注意を受けたり意見されたりされる人になろう、というのが一番いいと思ってやっています。

「素晴らしい」と言われている間はダメ。

みんなそれは言ってくれるんです。

大人だから。

そうじゃなくて、厳しい意見も言ってくれる人と、一緒に作っていかないと。

(澤田)

そのスタンスは、お仕事している中で出てきたのですか？

それとも、元々あったもの？

(ぼけっと河野さん)

形成されてきたと言うのはあります。

この業界に入ってから、現場で対応している自分の意見がどう考えても正しいと思っても、上からの指示とかみ合わない、だから納得いかない、ということは多かったです。

現場の意見はきっちり吸い上げて、こっちがしなくてはいけないこととのすり合わせは、必要です。

聞く耳は拡げてるつもり。

現場の人が自分の思いが伝わっていると実感できるような現場になったら、子どもたちと一緒に、スタッフにも自信がついて、やりたいことやって飛躍する、それが会社の成長と思っています。

(澤田)

スタッフの中にも「**自立支援**」と「**社会参加**」、ということですね。

(ぼけっと河野さん)

はい。



(※1周年記念パーティーで再結成したお笑いトリオ「グーニーズ」)



そういうスタッフが今後トップになって、そして新しいことを初めてくなって、例えば「実は料理上手いからレストランしたいんやけど」と言い出してきて、そしたらぼけっとしてレストラン経営を始めて、そのスタッフに完全に任せて、子供たちの新しい活動の場としてが広がって、ということもしたいと思っています。野望が無い人もいますけど、そういう人ばかりだと発展しないですね。

居心地良くて、思い通りになるから。

言われるままやってただけだと活躍が広がらない。

それだと、いつまでも自分が最前線で活躍しないとないといけなくなる、というのはちょっと違うなと思っていて、何かにつけて、とりあえず「いいね～。それやって」と言って、任せています。責任感はみんなにおのずと持たせてると思います。



(澤田)

それは先の先のビジョンですよね。

現時点では、次はどう展開していこうとお考えですか？

(ぼけっと河野さん)

オープン当初の「まず無知なまま現場で感じてもらってから」という考え方で矛盾するように聞こえるかも知れませんが、専門性のない人の集まりなので、発展の仕方が難しいです。

物凄いい人たちに恵まれているので、このメンバーですとできればいいけれど、トップにはなれません。

ヘルパーの資格+実務経験で、児童発達支援管理責任者になる資格となるのですが、それにはまず、ヘルパーの資格を取りに行かないといけないので、難しい。

では外部からということで、今の仕事しながら新しい人と出会わないといけないので、出来るだけ自分はフリーにしてもらって、いろんな人に会いに行っています。

スタッフの皆さんは理解してくれています。

自分が一緒にやりたいと思う人は、今のメンバーとビジョンが一緒なはず。

そっちの現場で同じようなくすぶりがあるって、思うようにやりたいな～と思う人が一緒にやってくれるというのなら、自分が場所を提供しさえすればいいのであって、あとは勝手にどんどん良くなっていきます。

まあ数年はかかるとは思いますが。

好きなことしてくれればいいと思っています。

——河野さん個人のこと

(澤田)

そもそもの話を伺いますが、河野さんはなぜ、この福祉のお仕事されるようになったのですか？

(ぼけっと河野さん)

岡本さんの紹介です。

岡本さんは、元々この地域の学校の介助員をしていて、「向いてると思うんやけど。やるなら担当の人に言ってみるよ」と声かけてもらいました。

無知のまま、障害とか知らないまま受けて、縁あって、させてもらって。

それがスタートでした。



(澤田)

やってみてどうでしたか？

ハマったのですか？

(ぼけっと河野さん)

ハマったというか、特に何があったわけじゃないですけど、対応して喜んでくれたりとか、うまく生活とマッチングできたときに、楽しい、やりがいを見つけた、と感じました。欲というか、やりたいことがいっぱい出てきました。

(澤田)

ビジョン誕生の瞬間ですね。
おいくつの時ですか？



(ぼけっと河野さん)

24歳、23歳くらいです。

最初のころ、重度の自閉症の子と、脳性まひで身体が不自由な子で、どちらも言語が乏しくて、非言語のコミュニケーションの中でやっていました。

言葉の無い状況というのは、すごく相手のことを考えないといけません。

何が言いたいのか、何がしたいのか、言葉で伝えてくれません。

その頃の自分を思い出すと、とても相手の立場に立っていたなあ、相手のことすごく考えてたなあ、と思います。

だからうまく行ったのかなあ、というところがありました。

(澤田)

言葉が無いコミュニケーション……。ちょっと想像が付きません。

(ぼけっと河野さん)

たとえば、外に遊びに行きたいと思っても、外に遊びに行っていないですか？と言葉に出して言うのではなく、職員さんをドアに連れて行って、ドアに手をかけさせる。

言葉を受け取るのではなく、その行動から相手の気持ちを汲み取る、というコミュニケーションです。

(澤田)

そういうのが、言葉が無いコミュニケーション、なのですね。

(ぼけっと河野さん)

そこが自分の何もかもの出発点でしたね。

ぼけっとでも、その時の経験は、大きく活きていると思います。

——業界全体のこと

(澤田)

業界全体のことについて、どう考えてらっしゃいますか？
話しにくい部分もあるかと思いますが、お聞かせいただけませんかでしょうか。

(ぼけっと河野さん)

障害児教育の先生や保育士さんだと、それだけの対価がもらえるというか生活できるのですが、福祉はそうじゃなくて、恵まれていません。

報酬単価貰って、この中でスタッフにお金払って、運営しているけど、そんなに儲かる仕事じゃない、潤うまでは行かない。生活や人生のこと考えると、福祉は、あまり目指さないほうがいい仕事・業種、というのが認識としてあります。

そこを変えないと、いい人材集まらない！

そこを変えないと、発展につながらない！

と思っているので、だから自分は、ぼけっとでは人を増やすし、そのお給料きっちり払いたいと思ってやっています。



保育士さんの仕事は楽しいでしょ、やりがいがあるでしょ、同じぐらい放課後デイの指導員も楽しいですよ、やりがいありますよ、と言うのなら、同等の待遇でなければと思っています。

ぼけっとの独身スタッフが、ぼけっとに勤めたまま、胸を張って結婚できることが、当面の目標です。

今の給料だと繋ぎ止められないかもしれない。

(澤田)

そうか〜。

社長さんというのはそこまで考えないといけないんですね。

スタッフの奥さんにプレゼンできるくらいの、いい職場にしておかないと、その人辞めてしまうんですね。

(ぼけっと河野さん)

理解ある家族の支えがあって、働いているという感謝も込めて、パーティーには家族の皆さんもお呼びしたのです。

そうしていかないと、業界の成長はないと思っています。

(澤田)

パーティー会場で奥さまにお話をお聞きしましたが、ぼけっとを立ち上げた河野さんのこと、奥さまは妻として「まあ大丈夫だろう」と思っていたそうです。

奥さまの信頼は厚かったんですね。



(ぼけっと河野さん)

それは家計のこと言ってるのではないと思いますよ。

人の下で仕事していて、思ってること実現できなくて、って頃は、奥さん曰く、家で嫌なこといっぱい言ってたそうです。

そういう良くない感じから、

「こんなことやりたいと思ってるんだけど」

「自分で作ったほうがいい！」

「やりたいことは自分でやるしかない！」

「やるけど、すみません」

というふうな感じで、独立しました。

自分がぼけっとでやりたいことやりだしてからは、家に帰って嫌な姿見たくないから、今のほうがいい、と思ってるようです。

(澤田)

経営者となってみて、見えてきたものはありますか？

(ぼけっと河野さん)

自分は経営じゃなくて事業をしているつもりです。

自分でやるしかないなと思ったのはなんでかと言うと、トップが必ずしも障害に理解のある人ばかりじゃない、というのが大きいです。

そういう「経営者」に意見しても本質的なところで伝わらないし、その人たちは自分たちとは目的が違います。

最初は志が高い経営者であっても、福祉業界は儲からないから別の業界に行かざるを得ない、せっかくやり始めた人が残らない、経験ある人たちが生きていけない、そんな業界であることは残念ながら事実です。

そこを変えていきたいと強く思ったから、自分でやるしかないと決めました。



(澤田)

非言語コミュニケーション、に近いものがあると感じましたが……違うか。

(ぼけっと河野さん)

いや、そのとおりで、ユーザーはものを言ってはくれないうです。

河野さんすごくいいから残ってよ、ということは、障害児はうまく訴えられません。

保護者さんに「事業所のこと関心持ってください」と言っているのは、子供たちはうまく訴えられないからです。

保護者さんに子供たちの口になってもらわないと、事業所には伝わらないということです。

そして、施設の選択権は子供たちと保護者さんたちにあるから、「明日から別のところに行きます」と言われたら、その事業所は簡単に潰れてしまいます。

本当に潰れていいところかどうか、保護者さんにしっかり見て欲しいと思っています。

この業界は、始めやすくして一定の収入はあるということで、逆に言うと今はプチバブルで、経営者が多いです。

働く人にとっては、しんどいかな？ しんどくないかもですね。

事業所によって全然違います。

頑張っている事業所は、その分、体力的、精神的、経済的にしんどいです。

でも、そこを譲ったら絶対にアカンから、ぼけっとは、子供たちにとって、そして保護者さんたちにとっても、良い事業所だとアピールしてます。

だからといって、同業者をライバル視するような風潮は、自分は嫌なのです。

事業所それぞれにいいところがあり、それぞれのビジョンに沿って特化しているので、それぞれのいいところを見てもらえたらいいなと思っています。

そしてその情報を、みんなで共有できたら、自分が別の事業所をお薦めできるし、別の人がぼけっとをお薦めしてくれるし、これはお互いにすごくいいと思うので、そういう業界にしたいと思っています。

残念ですがまだそこまでの社会ではないです。

でも自分が率先して楽しい業界にしていけないといけない、と思っています。

(澤田)

そのために、具体的にどんな活動を、個人的にしていこうと考えていますか？

(ぼけっと河野さん)

自分の経歴だけでは、話をきいてくれない人も多いです。

高卒ですと言ったらへえ~~~~~という冷ややかな反応になることもあります。

僕と同じ意見を持った人で、学校の先生をやっていました、という人が言えば、そこで僕の主張が認められる。

だからいろんな人と、自分の持ってないものを補い合えるような人と、かつ思いが同じ人と、繋がりたいと思っています。

(澤田)

この「コメきく」が、その一役を担えればと思っています。

(ぼけっと河野さん)

よろしくお願いします。

でも、苦手なことは苦手です、と言うようにしています。

いいかっこして、出来ないことを出来るようには、しないほうがいいと思っています。

出来る人に頼ればいいのですから。

子供たちも一緒です。

ハンデ持って生まれたけど、でもいいところもいっぱいあるということです。

得意な部分を伸ばせばいい。

いいところを伸ばせばいい。

そういうところをきちんと見て、そして褒めてあげたい。

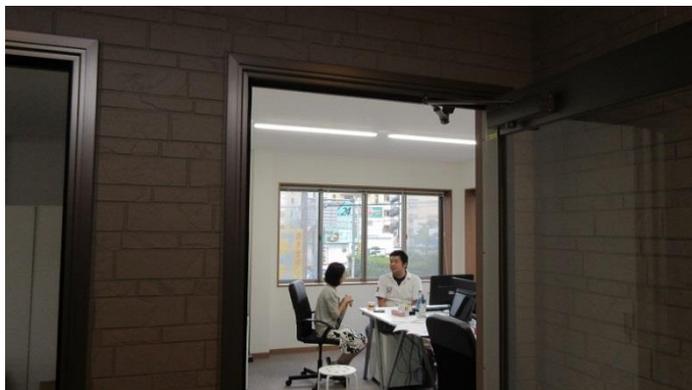
そう思っています。

(澤田)

「自己肯定感」を促す、ということですね。

(ぼけっと河野さん)

はい、それがぼけっとの理念です。



(澤田)

そもそも、ぽけっとさんはなぜ、「ぽけっと」さんなのでしたっけ？

(ぽけっと河野さん)

「ぽけっと」って、自然と利用したり、さりげなさど重要性が好きだなと思ってつけました。シャツやズボンにポケットがあることを常に意識して、常に必要としている人はそんなにいないと思うんです。でも、何かを手に持ってて、手に溢れてきたら、

「じゃあ、とりあえずポケットに」

と、無意識のうちに、さりげなく必要されているのが、ポケットだと思うんです。

そういう位置づけが、この事業所のビジョンに似ているな、と思いました。

もう一つ、良く言えば、

「いっぱい詰め込んで、一緒に進んでいこう」

ということもあります。

(澤田)

行動指針の頭文字を取って「POCKET」じゃなかったんですか？



(ぽけっと河野さん)

あれは完全に後付けです(笑)。

でも完璧にハマったんで、我ながら先見の明あるなあ～、と自画自賛です。

(澤田)

自己評価、高いですね(笑)。

(ぽけっと河野さん)

基本的に自己評価、めちゃくちゃ高いです(笑)。

(澤田)

今日はありがとうございました。

(ぽけっと河野さん)

こちらこそありがとうございました。

～次のページからはスタッフの皆さんにご登場いただきます。

——ぼけっと岡本さん

(澤田)
岡本さんです。
よろしくお願いします。

(ぼけっと岡本さん)
お願いしまーす。
いつもありがとうございます。



(澤田)
岡本さんは、私が開所手続をお手伝いしている頃、いつも河野さんと一緒に行動してらっしゃいました。物件や車や設備の選定にあたって、河野さんは岡本さんとよく相談してらっしゃったのが印象的でした。まず、岡本さんがこの業界に入ったきっかけ、そして河野さんと一緒に「ぼけっと」を立ち上げた前後についてお聞きします。

(ぼけっと岡本さん)
介護ヘルパーをしていた姉が「老人の介護だけじゃなくて、障害持ってる人を介護するのもあるよ」と教えてくれて、「あ、そんなんや。そういう人たちのお手伝いをしよう」と思って資格を取りに行き、そういう仕事をたくさんしてきました。河野さんとは、共通の友人を通じて知り合って、仲良くしているうちに、こっちの仕事のほうが向いていると思って誘いました。ぼけっとを立ち上げる前は、河野さんと同じ事業所で働いていて、河野さんが「放課後等デイサービスの外に出て、社会参加をどんどんどんどんしていくべきだ」と考えていて、僕も全く同じことを思っていましたので、河野さんが新しい放課後デイを立ち上げると言い出した時に、「僕も一緒にやりたい！」と思いました。最初のスタートするときは、利用者さんが本当に来てくれるのかなという不安でいっぱいでした。実際に、何人か利用者さんが来てくれて、ロコミでどんどん友達とか紹介してくれて、一気にパーッと利用者さんが増えていったので、その時にほっとしました。

(澤田)
岡本さんの、普段のお仕事についてお聞かせください。

(ぼけっと岡本さん)
ぼけっとの日々の日報はつけていますが、会社の事務的なことはノータッチで、常に現場で子供たちと一緒にいます。前までは、その日一日の流れを僕が決めていましたが、最近は黒川さんにやってもらっています。「こんな感じでどうですかね？」みたいな感じで聞いてきて、それでいこうか、とか、こんな感じでしたらどうかな、とか言うときもありますが、黒川さんに勉強してもらいたいので、まず黒川さんに考えてもらっています。代表の河野さんが現場にいないことが多いので、何かあった時に自分がしっかり対応しないといけないと思っていますし、いないときに何か起こったらすぐ報告させてもらっています。



(澤田)
現場のトップとして、岡本さんの的には、これから先、どうしていこうと考えていますか？

(ぼけっと岡本さん)
今はやっぱり、小学校1年から高校3年までが同じ空間というのはどうかなと思うので、そこは分けたいと思っています。体格も遊びの内容も体力も全然違うので。もっと先のことだと、今来てる子たちの高校卒業後の就職先とかにも関わりたいし、その先もずっと繋がってほしいと思っていますので、関わり方は変わるかも知れませんが、ずっと見守ってほしいと思っています。

(澤田)
ぼけっとさんがオープンして1年が経ちましたが、岡本さんの的には、これという大失敗はありましたか？

(ぼけっと岡本さん)

大失敗という、登山ですかね。
その日は体調悪かったのです。
下見の時から登山に自信が無くて、さらに当日体調悪かったので、子供たちとは一緒に登頂できなかったのです。
みんなが先先行って、もうみんな行ってしまっ、あとから必死について行くみたいな感じになってしまいました。
頂上には登れたんですけど、普通こっちが「がんばって～」「もうちょっとやで～」みたいに声かけてあげるのに、逆に子供たちから「もうすぐやで～」「ガンバレ～」と応援してもらいました。
体力不足に加えて、体調をちゃんと万全にしていけなかったのが、一番の失敗だなあとと思います。



(澤田)

それはそれで子供たちにとっても、ためになる出来事になったんじゃないかなと思いますよ。
ではもう一つ質問です。
河野さんが、「自己肯定感」「自己評価が高い」という話をずっとしていたのです。
自分に自信がつくし、だからスタッフさんにも、子供たちにも、そうなってほしいと。
なので、岡本さん、ここで、**自分を思いっきり褒めてください。**

(ぼけっと岡本さん)

ははははは、自分を褒めるんですか(笑)。
う～ん、そうですね、「冷静だ」ということですね。
子供どうし喧嘩したり、子供たちがパニックになったりしたとき、スタッフがなだめたりする場面がありますが、そういう時、一応冷静に対処できると思っています。
自分は落ち着いて行動できてるんちゃうかな、冷静さを保てるな、と感じています。
経験もあるし、そこまでが一つとならないタイプなので。



(澤田)

今日はご協力ありがとうございました。

(ぼけっと岡本さん)

ありがとうございました。

——ぼけっと椿さん

(澤田)

では3人目は、事務方トップの椿さんです。
椿さんは、オープン当初からスタッフとして働いていましたが、どのようなお仕事をされているのですか？

(ぼけっと椿さん)

会計とか、事務ということで、一応総務長と言われています。
でも、子供たちが来たら、子供たちと一緒に過ごします。
子供がいない時間に事務方の仕事をして、という感じで、現場と事務方とを、半々ぐらいの割合で仕事をしています。
親御さんの意向を聞いて、だいたいこの時間に子供を送る・迎えに行く、の予定を組んで送迎の順番・時間の表を作ります。
その他に、会計上の入力仕事をしたり、税理士の先生とお話したりすることもたまにあります。
河野さんから仕事を引き継いでやることもあります。



(澤田)

ここで働くことになったきっかけを教えてください。

(ぼけっと椿さん)

河野さんとは元々友人でした。

そして、河野さんがこの「ぼけっと」立ち上げる時に、手伝ってほしいと言われました。

河野さんとはよく食事に行っていて、放課後デイがどんな感じか、というのは聞いてはいました。

子供と接するというのは、空手の指導員を町の道場で20年近くやっていたので、初めてではありませんでした。

でも、「放課後等デイサービス」というのも、ここで働くまで全く知りませんでした。

(澤田)

働き始めた当初はどうでしたか？

(ぼけっと椿さん)

子供を相手をするので、「先生」というイメージが強かったのですが、自分が思っていたのと、だいぶ違っていました。

だから、指導するのだと思って、空手のときのように「こら！ そうじゃない！」という接し方を、どうしてもしてしまっていたが、それでは子供たちは全く聞いてくれなかったです。

より親密に接しないと、打ち解けてくれないと、こっちの言うことは聞いてくれないのだ、とすごく感じました。

最近はそういう「こうや！」という感じではなくなってきました。

でも、危ないことに関しては、きつく止めますけどね。

ケンカとか、子供たちどうしの接触というのがやはりあるので、そういう時には、車でどちらかひとり連れて行って、話して落ち着かせる、ということをします。

部屋に戻ってきたら、普通に仲良く出来ています。

こういったことが良くあるのです。

日常茶飯事です。



(澤田)

これからこうしていきたい、という野望というか展望はあるのですか？

(ぼけっと椿さん)

本当は次のこと考えなあかんですけど、とにかく素人から始めているので、まだまだ足りないところが多くて、至っていないなあと思っていて、だから、あと1、2年は勉強していかなんと思っています。

請求関係も習ってきてるけど、まだ全然至らないし、現場でもベテラン組に比べて随分足りてないと思うのです。

わ〜っとパニックになっている子どもさんをいかに立ちなおせられるか」というところが特に難しいのです。

現状では、そうなる前には止められているのですが、完全にパニックになってしまったときは、ベテランの河野さん岡本さんはうまいこと立ち直させるし、それが早いけど、僕はとても時間がかかってしまうのです。

こういうところが全然至らない、本当に全然なので、まだまだ勉強していかな、と思っています。



(澤田)

本当に全く知らないところからお仕事始められて、それで今これだけ仕事されてるのは、本当に凄いです。

では、今までで一番嬉しかったことは何ですか？

(ぼけっと椿さん)

やっぱり二上山登山ですね。

河野さん岡本さん川上さん(※インタビュー6人目が川上さん)の4人で下見に行ったのですが、正直、これはちょっと子供たちには無理なんじゃないか? と思ったのです。でも、実際は、全員で盛り切りました。子供たちの力はすごいです。登らすためのスタッフの努力もあったけど、でも結局は自分一人なので、あの達成感は嬉しかったですね。スタッフたちもみんな結構頑張ったので、思い出に残ってるはずです。



(澤田)
この仕事は結構体力勝負ですか?

(ぼけっと椿さん)

子供たちは元気だし、公園では走っていくのをついていくし、公園出てしまう子もいるので捕まえますし、汗だくになりますよ。

(澤田)
社内の経営会議とか、スタッフ会議では、みなさんどんな感じですか?

(ぼけっと椿さん)

話し合いの場と言うのは、朝礼か、子供たちが帰った夕方に残ってダベってる時にすることが多いです。いつも朝礼は5分10分ですが、長いときは長くなります。問題行動があったりすると、隣の会議室で話し合いをして、問題に対して報告を上げて、というような形で話し合いをします。スタッフ間ではあんまりケンカはないのです。もともと友人というもあるし、河野さんの信念やぼけっとの理念に賛同して、一緒に働いている人が多いからだと思います。

(澤田)
では、この1年で一番の大失敗を教えてください。

(ぼけっと椿さん)

今まで、いろんなことがあったが、大ケガはないのです。そういった面では、全然セーフと言うか、失敗はありません。ぎりぎり逃れたというわけでもありません。河野さんの信念が、「少ない人数で見るのは違う、もっと手厚く」ということであり、だから、他の放課後デイよりは人数を入れていて、これがケガに繋がってないのだと思っています。でも、失敗と言うなら、やはり、子供に対してきつく当たってしまい、それでわ～ってパニックにさせてしまった時ですね。



(澤田)
河野さんは、自己評価高い、自己肯定感は大事で、子供たちにも職員にもそれを持ってもらいたい、と仰っていました。自分に自信を持つというのはすごい影響を与えるということでした。ですから、椿さんも、今ここで、ご自身のこと、すごく褒めてください。

(ぼけっと椿さん)

えーと、辛抱強いとは思いますが。そのぐらいしか思い浮かびません。父親は厳しいし、空手も30年近くやっていたから、子供のころから辛抱強い、我慢強いです。

(澤田)
これからも健康に気を付けてお仕事頑張ってください。

(ぼけっと椿さん)

ありがとうございました。

——ぼけっと黒川さん

(澤田)

4人目は最年少の黒川さんです。
黒川さんは勤務してどのくらいですか？

(ぼけっと黒川さん)

ちょうど1年経ったところです。
前の職場で一緒に働いていた椿さんに誘われて入りました。
もともと非常勤でしたが、2月くらいから常勤になりました。
最初は掛け持ちしながら、子供たちと遊ぶだけの仕事かと思っていましたが、入ってみたら全然違いました。

(澤田)

入る際に、こうした方がいいとか、こうしてください的な話は、ぼけっとさんからはありましたか？

(ぼけっと黒川さん)

凄く疲れるよとは言われていました。
なので体力面は、すごく覚悟して入ってきました。
何にもトレーニングとかはしてないですけど、この仕事するようになってから走るのが早くなりました。
今日遊びに行っている公園は柵のあるところだからそんな広くないのですが、大きい公園に行った時の鬼ごっこが大変で、ひたすら追いかける役になっています。
体力勝負です。
仕事を初めてすぐに夏休みだったので、毎日毎日「ああああ～～～～大変」みたいな感じでした。

(澤田)

実際、働いてみてどうですか？

(ぼけっと黒川さん)

もう毎日、色々いろんなことをするので、どんどん新しいことが経験できています。
僕は本当にインドア派だったので、プールに行くとか、ハイキング、バーベキューなんて、ほとんど経験ない状態でした。
しかもそれを、子供たちを指導しながらやらないといけないので、プレッシャーや緊張の毎日です。
でも、緊張はしますが、しんどくはないです。
一緒に暮らしてるいとはダウン症ですし、ほかにも身内で自閉症の子もいたし、そういうハードルはもともとなかったんです。
もともと「緊張しい」なんです。
1周年記念パーティーの職員紹介スライドの時、前でしゃべるのとても緊張しました。
変顔とか撮ってそれをスライドに載せて紹介したときのことで。
初めてのことは緊張します。

(澤田)

あのパーティーの後、保護者さんとの関係で、何か変化はありましたか？

(ぼけっと黒川さん)

保護者さんから声かけてもらうことが多くなりました。
趣味が一緒だとか、出身が一緒とかです。
河野さんから聞いたのですが、普段の送迎のときと、みんなでバーベキューやったときで、僕のイメージが変わったそうです。
どうやらお母さんたちは、送迎のときの僕を見ていて、僕は色んな子どもさんと遊ぶの無理だと思われてたらしいのです。
でも、バーベキューの時に、子供たちと一緒に過ごす普段の僕の姿を見て、この人遊べてるなって思ったそうです。
今はコミュニケーション取れてるなと思っています。



(澤田)
保護者さんに会うのは送迎の時だけですか？

(ぼけっと黒川さん)

保護者さんとの交流は、普段は送迎の時だけです。
その他は、月に1回発行する「ぼけっとタイムズ」で知ってもらうぐらいです。
子どもさんの連絡帳もあって、今は自分も少し書かせてもらっていますが、結構簡潔に書いています。
書くより、子どもさんを見ている方が大事ですから。
その分、送迎の時に、今日どうだったかとか、現状をうまく伝えるようにしています。

(澤田)
他には黒川さんはどんなお仕事を？

(ぼけっと黒川さん)

利用希望を取ってまとめて管理しています。
1日の定員が15名ですが、それより多くの方が希望すると重なってしまって、希望に添えないとき7月にもありました。
最初は定員が10名でしたので、この1年で大きくなったなと思いました。

(澤田)
黒川さんがここでお仕事を、今までに大きな失敗はありましたか？

(ぼけっと黒川さん)

子供さん見てる時に、一人、足元のおぼつかないお子さんがいて、一瞬目を離れたすきにソファに立ち上がって落ちてしまったことがありました。

僕と女性スタッフ二人でいて、その子に一番注意しなきゃいけないのに、目を離してしまって、けがはなくて良かったんですけど、一歩間違えていたら、と思います。

あとは、車に乗っている時に、走行中に助手席の子が、ドアの鍵を開けて一瞬パツと開けちゃったことがありました。

僕は真後ろに乗ってたので、慌てて手を伸ばして止めて閉めたんですけど、その時その子の状態が悪い感じになってしまったので、もっと前に何かしないといけなかったのだけど、その時は初めてのことだったのでそれができず、びっくりしました。

それが、非常勤から常勤に代わってすぐのタイミングだったので、結構堪えました。



(澤田)
では最後に、自己肯定力、自己評価が高いと、河野さんはおっしゃっていました。
自分を褒めて、自分に自信を持って、皆さん自分にいい影響を、ということでした。
なので、黒川さん、思いっきり自分のこと褒めてください。

(ぼけっと黒川さん)

そうですね、全然怒らない、というのはあります。

(澤田)
椿さんは我慢強いと言っていましたけど、そもそも我慢してもいないということですね。
それは、全く、ふつつつともしないのですか？

(ぼけっと黒川さん)

あまりふつつつともしなくて、元々怒ることが無いので、子供と遊んでいて怒るということは全然ないです。
子供たちと一緒に楽しく、自分も楽しく遊べてるのが、子供たちに伝わってるのかと思います。

(澤田)
凄い言葉を頂きました。ありがとうございました。

——ぼけっと水野さん

(澤田)

5人目は、元グーニーズのボケ担当、水野さんです。
水野さんは、河野さんの昔からのご友人と聞いていますが、いつからのご関係なのですか？

(ぼけっと水野さん)

河野君とは高1の時の同級生で、それ以来の付き合いです。
最近こういう仕事させてもらう関係になりました。

元々眼科の事務長をしていて、医療事務、お手伝い、スタッフの管理、ドクタースケジュールの管理、何でもやっていた。そこを今年1月に退職して、次のところで働くまでの間1年弱あるからなにしようかな？ と思っていて、たまたま遊びで集まった時に、河野君から「ぼけっとで運転手も必要やから、もし手伝ってもらえるなら、最初は運転手として、簡単な仕事でいいから手伝ってくれへんか」と声をかけてもらいました。

(澤田)

どういう感じに入って、どういう感じで過ごしていますか？

(ぼけっと水野さん)

障害のある子どもたちを見てるとは聞いていました。

ただ、介護に近いような仕事かと思ってましたが、いざ来てみたら精神的な障害の子がほとんどで、会話できる子もいるし、楽しく遊んであげたら成り立つのかなと、そういう感じで入りました。

子供も嫌いじゃないし、全力で楽しく遊んであげることぐらいなら、未経験の僕でもできると思っています。

専門的な部分は河野君がフォローしてくれます。

基本的に僕は他のスタッフさんと違って、友達から入っているので、好きに遊んでくれたらいいよ、というアバウトな感じで入れてくれています。

自分なりに、この子はこうしたら楽しくなるだろうと考えて、接しています。

今はしたくないのか、遊びたいのか、その子の遊びたいこととかがわかってくるので、それをしっかり感じて、対応しています。入って直接遊んで、その反応見て考えて、また対応変えていくことの繰り返しです。

そこに「教えてもらう」は一切ないです。

悪いとこあったら言ってくれるだろうと思うけど、でも言われたことないので、河野君の中の「間違っただこと」は、今のところはしていないのだと思います。

そのまま正解、マッチしてるからそのままええよ、と言うてくれます。

(澤田)

ご友人としての河野さんはどうですか？

(ぼけっと水野さん)

さっきから「河野君」言うてますけど、普段は「くまさん」と呼んでいます。

大きいので。

正直、真面目なところは見たことなかったです。

どっちかと言うと、他の友達と同じ感想で、「ちゃんとやってんねんな」という感じでした。

驚きです。

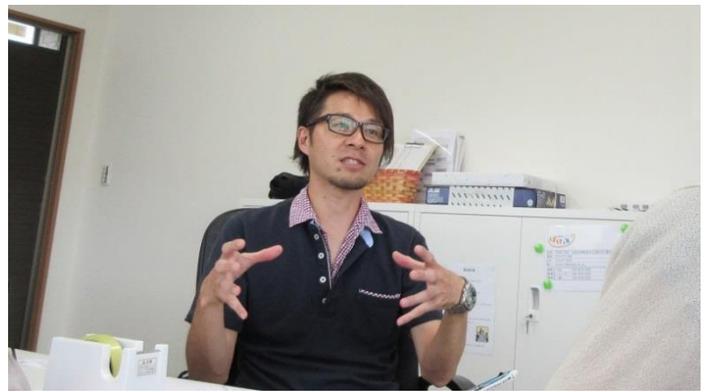
僕ら(元グーニーズ)の3人でよく集まるのですが、その時はふざけることしかしてないです。

(澤田)

河野さんは、ご自身の「ふざけることができる能力」が、ここでは発揮できると話していました。

(ぼけっと水野さん)

僕が来たことによって、普段ふざけてる自分を、河野君はよく出せてるんじゃないかと思います。



(澤田)

山登りでの水野さんのお話聞きました。

一人遅れてしまった子がいて、水野さんがその子と一緒に頑張って、最後まで連れて行ったと。

おんぶするのは簡単だけど、そうじゃない、と言って、最後まで歩かせたと。

(ぼけっと水野さん)

中途半端に下山させても、誰も喜ばないと思ったのです。

保護者さんも、もちろん本人も、誰も喜ばない。

時間あるし、その日中に上って下りればいいのか、時間かかってでもいいか、と付き合っただけです。

たまたま近くにその子がいて、僕のこと結構好いてくれてとか、いつも来てくれて、だから僕がついていくのが一番すんなりいくなかと思ってそうしました。

だから、僕がどうこうじゃなくて、その女の子が、すごく頑張ったんです。



(澤田)

みなさん水野さんのこと物凄く褒めてらっしゃったので、てっきりご自身も自慢げに語られるのかと思っていました(笑)。

(ぼけっと水野さん)

チャライのは見た目だけです(笑)。

でも、ここにいるのは短期間と決まっていて、せっかくだから爪痕残したいとは思っていたので、とても良かったと思います。

(澤田)

逆に、今までの間にやらかした、大失敗はありますか？

(ぼけっと水野さん)

失敗は、別に……ない、かな。

スタッフどうし声かけあってやってるのが、いいのかなと思います。

(澤田)

河野さんは、自己評価高い、自己肯定感は大事で、子供たちにも職員にもそれを持ってもらいたい、とおっしゃっていました。ですから、今、自分のことすごく褒めてください。

(ぼけっと水野さん)

僕は細かいことによく気が付く方だと思っているので、現場とか全体を仕切る能力とかは、結構あると思っています。

岡本さんが休みの時は、誰が仕切る？ みたいな感じになりますけど、そういう時はなるべく仕切ろうと思っています。

3割くらいの力で遊んで、7割で全体を見る、という力があると思っています、自分は非常勤という立場だけど、そこは気づいた人がしなきゃいけないと思っています。

先輩後輩関係なくズバズバ言いあえるから、「こうしたらええんちゃうん」というのは社員さんと話して、問題点は小さなうちに遺そうと思ってやっています。

ぼけっとにとって、僕が役立っているところだと思っています。

もちろん、僕は未経験者なんで、経験者からも教えてもらうのだから、もちろん社員さんはリスペクトしています。



(澤田)

本当に素晴らしいですね。

あと半年くらいですが、ここでのお仕事頑張ってください。

(ぼけっと水野さん)

今まで関わった子もいるし、友達働いてるし、たまには仕事休みの時とかに、顔を出そうと思っています。

——ぼけっと川上さん

(澤田)

6人目は、山登りが趣味の川上さんです。
二上山登山は、下見のときから川上さんのお世話になった、
みなさん仰っていましたが、どうだったのですか？

(ぼけっと川上さん)

そうですね。

二上山と葛城山のどちらにしようか、迷ったんです。

(※岸和田市の和泉葛城山でなく金剛山系の大和葛城山のこと)

「登った感」があるのが二上山で、葛城山はロープウェイも使って楽しい感じで行けます。

二上山に下見に行った時、結論としては、「ちょっときびしいかな～」でした。

岡本さんが途中でリタイアしてしまいましたし。

でも、最後に河野さんが「二上山にしましょう」と決めました。

もしダメな子がいたら、どんなふうに対応するかまでを考えて、決めて登りましたが、これが全員、登ったのです。

ちっちゃい子もいるのに全員です。

みんな感動でした。

(澤田)

これはみなさん、素晴らしい成功体験だったことと思います。
その後なにか変化ありましたか？

(ぼけっと川上さん)

私はここにきて短いのですが、子供たちを見ていて、この期間だけでも皆さん凄い成長したと思うのです。

ここのスタッフの対応の仕方を、学校の先生も見習うべきだと思います。

学校ではうまく行っていないようなのだが、彼はここでは落ち着けているのだし、落ち着ける環境の設定とか声かけの仕方一つで、全然彼の様子が違ってくると思うのです。

突然荒れてしまうことはあるけども、何か原因があるはずだし、最初は仕方ないが、繰り返すということは、何がそうさせたのか、それを除去するために何ができるか、とやってあげたいと思います。

(澤田)

川上さんはこの業界長いとのことですが、なぜこういう仕事をはじめられたのですか？

(ぼけっと川上さん)

福祉の世界は、ぼけっとさんが初めてです。

元々特別支援、障害児教育のほうで仕事をしてきました。

JAICAのシニアボランティアで、マレーシアに行っていたのですが、そこでは、教育と福祉の連携ができていました。

そのシニアボランティアで行った時に見てきたような、福祉のほうから障害児の支援をしたいと思って、そういう立場で働ける場所を探したのです。

そうして「放課後等デイサービス」に行きつけました。

働く場所を探していて、ここは自分で探しました。

山ほどある放課後等デイサービスの、一番近いのがここだったし、ほかはいろいろ条件が合わなかったのです。

ここも60歳以上はアカンかったと思うけど、でも来てくださいと言われました。

40歳くらいの若いスタッフばかりですが、私はこの若いスタッフの中に入れてもらえることはラッキーだったと思います。

だから毎日とっても楽しいです。

一筋縄で行かない子たち、自分のどこを変えたらいいんだろう？ どういうアプローチしたら振り向いてくれるんだろう？ この子は何が言いたいんだろう？ と、考えるのが楽しいです。

ここの方針としては、圧力を与えずに子供をその気にさせるのがコンセプトです。

河野さんが「基本、普通にして」「特別扱いじゃなく、普通にして」と常々言ってはるのです。

自然体ですね。



とにかく、このスタッフさんはプロです。

子どもさんと向き合っている時と、事務所で話しているときに、全然違います。

事務所では真剣です、ものすごく。

話し合っ、日々改善してって、その姿勢は子供に反映されていきます。

しかも、ここに来るまでに、LINE(スタッフ間のLINEグループ)で、子供さんたちの情報が流れてきます。

これによって、自分がいない間の子供の様子を、常に把握することができます。

情報共有がうまくできています。

昨日いなくても、昨日の出来事を知っていると、「昨日あれからどうでしたか？」と聞けますし、そこから「昨日も、ちょっと落착くまで時間かかった」とか様子を教えてもらえます。

そしてまたLINEでその情報を流して、みんなで共有することができます。

でも、このシステムもこういう形になるまでにいろいろあって、失敗を改善してこういう形になったのだと思います。

スタッフの皆さんはいつも、失敗を絶対に失敗で終わらせず、次の成功へつなげていっています。

本当にプロの集まりだと思います。

(澤田)

失敗がありながら、それを失敗で終わらせず、次につなげて改善していくというのは、素晴らしいです。

では、川上さんは大きな失敗をしたことがありますか？

(ぼけっと川上さん)

大きくないけど失敗はたくさんあります。

例えば、高校生の男の子と一緒に、小さな輪ゴムでプレスレットを作っていたときのことです。

最初は、簡単なのから作りはじめて、だんだん難しいのを作っていました。

途中で分からなくなると、私に託してくるので、ここをこうしてこうして、と教えるのです。

でも、難しくなるにつれ、私にも作り方がわからないのが出てきたのです。

わからない、2回目もわからない、3回目もわからない、となった時、突然、彼が全部のものを上に放り投げてしまいました。

そこはそこで終わりましたが、これは反省しました。

少なくとも、彼に提示するのは、私ができるものでないとダメ。

彼がヘルプを出した時に、助けてあげられないのはダメ。

自分が足りないせいで、彼にパニックを起こさせてしまったのです。

これが失敗ですね。

(澤田)

河野さんの「基本、普通にして」という言葉が、なんとなくですが、よくわかるエピソードでした。

そんな河野さんは「自己評価を高く」「自己肯定感は大事」「子供たちにも職員にもそれを持ってもらいたい」と仰っていました。

なので、川上さんも、ご自身のこと思いっきり褒めてください。

(ぼけっと川上さん)

人の、いいところ、を見つけるのがすごく得意です。

あなた(澤田)はとても前向きで頑張り屋さんで、あなた(カメラマン&ディレクター中村)の笑顔は人を元気にします。

たぶん合ってると思います。

私は、小さいころ、苦手なこと多かつたし、親も褒めてくれなかつた子供時代だったのですが、たった一人の先生だけが、私を見ていて、鉄棒が得意だということを見ていてくれました。

とても嬉しくて、とても頑張ろうと思いました。

だから、人のいいところを見つけて、たくさん褒めるようにしています。

(澤田)

褒められるって気持ちいいですね。

今日は本当にありがとうございました。

(ぼけっと川上さん)

こちらこそ、ありがとうございました。



——ぼけっと遠土さん

(澤田)

7人目は私と同じワーキングマザーの遠土さんです。
ぼけっとさんと働किっかけと、働いてみてどうなのかを、お聞かしてください。

(ぼけっと遠土さん)

ここにきてから半年です。

それまでは学童保育とか、作業所とかで仕事してました。

ぼけっとに前いたスタッフさんが友達だったので、「ここで募集してるからどう？」みたいな感じで声かけてもらいました。
戸惑うことありながらも、今まで障害持ってる人の職場ばかりだったのでまあまあ入れたかなあとと思います。

(澤田)

なぜ、このような、障害を持った方と接するお仕事が多かったのですか？

(ぼけっと遠土さん)

ん～、別にそういう家族がいるわけでもなかったんですけど、元々幼稚園の先生になりたいくて、でも中々資格取ったりできなくて、一番最初の作業所がすんなりだったのは本当にたまたまで、仕事できる時間帯が合うのが一番大きくてそこに行ったんですけど、やっぱり大変さはあるけど、そこがなぜか普通にしくりました。

そういうところでは、作業所は小さい子ではなく大人の人たちですけど、一緒にやったり、手伝ったりするのが、もしかしたら自分に合ってたんだと思っています。

(澤田)

ワーキングマザーのしんどい部分が垣間見れました。

で、実際ぼけっとさんでお仕事をされて、日々どう感じていますか？

(ぼけっと遠土さん)

時間が早く感じます。

過ぎていく時間が早いです。

私は出勤時間いろいろで、お昼からの時もあるけど、そういうときは特にあっという間に終わります。

(澤田)

今日はカレーを作っていましたね。

私たちが頂きまして、ありがとうございました。

とてもおいしかったです。

クッキングは多いのですか？

(ぼけっと遠土さん)

月に一度か二度あります。

私が担当に入ることが多いです。

この間はサンドイッチを作りました。

何を作るかは河野さんたちが決めますが、子供たちの希望を聞いて、子供たちが出来るかどうか含めて判断しているようです。

(澤田)

カレーを食べた後、短時間ですが子供たちと遊んだのですが、女の子に物凄く気に入ってもらえて、私ずっと遊んでました。
女性の職員さん、今日も何人かいらっしゃいますが、女性特有の役割はあるのでしょうか？

(ぼけっと遠土さん)

女の子のトイレの介助とかが必要です。

まだ小さい子いるし。

自分で行けても、呼ばれた時にすぐ行けないといけないので、必ず女性スタッフはいます。



(澤田)

これから先も、ここで働きたいとか、ステップアップしていきたいとか、何か考えていることはありますか？

(ぼけっと遠土さん)

今は、ここがベストマッチなので、ずっとここで、と考えています。
ステップアップしてもっと大きいところとか、立ち上げるとかはなく、「現場」でずっと仕事していきたい主義です。
同じ仕事で、ほかの場所に行くことは考えていません。
ここが楽しいですね。

(澤田)

嫌だな～仕事行きたくないな～と思うことはないですか？

(ぼけっと遠土さん)

失敗したな～、はあるし、考えたりはあるけど、嫌やな～まで
はないです。
今のところは、これからわかんないですけど。



(澤田)

皆さんにお訊きしているのですが、お勤めになってから半年、ああこれはやってしまった！ という大きな失敗はありますか？

(ぼけっと遠土さん)

ん～、大きいかな～、どうでしょう。
初日に子供一人を泣かせてしまって、それが最初のああ～やってしまったというやつです。
前にいた学童保育に通っていた子がいて、ただ、2年くらい会ってなくて、でも憶えてくれるやろうと、「なんで憶えてくれないんよ～」と、今までのノリで接したら、その子泣いてしまいました。
今は仲良しですけど、その時はショックでした。
その時は、もう、その子自体が、私にぐいぐい来られて、私の圧がすごくて、でも「誰やったっけ？」と思い出されへん自分からのプレッシャーと、私にぐいぐい来られるので、泣いてしまったんだと思います。
それではいけないなと初日に思いました。

(澤田)

それは今ではもう改善されているということですね。

(ぼけっと遠土さん)

もうOKです。
でも結構ぐいぐい行って怒らせたりするのはあるかもです。
でも、笑いで終わるようにしています。

(澤田)

では遠土さんも、ここでご自身をすごく褒めてください。
自己PR込めて、どうぞ。



(ぼけっと遠土さん)

え、ちょっと待って、褒めていいんですか？ どうしよう！
そうですね～、子供たちと同じ立場で拗ねたり、怒ったり、笑ったりしたいと思っているのと、そうしてるつもりです。
怒るのは良くないけど、同じ立場で喧嘩するし、違うと思ったら違うって言うし、面白かったら一緒に遊ぶし、痛かったら泣くし。
スタッフっていう立場も大事だと思うけど、私は、それをできていると思っています。

(澤田)

子供目線になるということですね。
ありがとうございました。

(ぼけっと遠土さん)

ありがとうございました。

——ぼけっと河口さん

(澤田)

では最後に河口さん、よろしくお願いします。
お勤めしてどのくらいですか？

(ぼけっと河口さん)

1月からなので半年くらいです。

河野さんと知り合いだったので声をかけてもらいました。

スタッフ足りないから良ければどうかと。

前の仕事辞めてすぐだったのと、運転手探しているということだったので、何も知らない状態でしたが、経験したいというのと、知っておきたいという好奇心だけで入りました。

どう接したりしたらいいとかいう指導はないですし、自分のオリジナルでやってみたら？ というスタンスでした。

実際、自分の距離感が一番いいですね。



(澤田)

入ってみてどうでしたか？

(ぼけっと河口さん)

最初は、遊ぶの一時間であとは送迎という話でしたが、だんだん遊ぶ時間が増えてきました。

最初はやっぱり難しい、未知の世界、普通の子供と同じように接していけるのか、と思っていましたが、そういうハテナの部分が徐々に埋まって行って、何も変わらないや、一緒に遊ぶだけなら問題ないや、と思いました。

(澤田)

子供たちもそう言う人を求めているんじゃないかと思うんです。

全力で遊んでくれるお兄ちゃん感が、楽しいと思います。

(ぼけっと河口さん)

とにかく、壁を作らないようにしています。

子供からしたら先生みたいに思ってるかもだけど、私的にはそれは気持ち悪い。

だから、自分自身が子供だと思って、一緒にレベルで話すようにしています。

口が悪い時もあります。

その方がたぶん子供がこっちに来やすいと思うのです。

どこまでバカになれるか、自分を崩せるか、プライドを捨てられるか、というのが大事なのだと思います。

人それぞれ、性格にもよるけど、出来るだけ子供を巻き込んでいけるようにと思っています。



(澤田)

では例の質問を。

河口さんがここでお仕事をして、今までにやらかした大きな失敗はありますか？

(ぼけっと河口さん)

大失敗ですか……、いや、多分ないですよ。

小さい、こういうときはこうしたら良かったな、と振り返ることはあるけど、それは失敗とは思わないです。

例えば、気持ち汲み取れなくて泣かせてしまった、それはどうしても仕方ないことで、その時自分は何もできなかった、でも次はこうしよう、次に自分は何ができるか、を常に考えてたら、自分の成長につながるし、試して行けることに繋がるし、なので失敗ではないです。

自分の考えを言葉に出すのは難しいけど、スタッフさん同志、言葉にして、気持ちを共有するというのは凄くしています。

共有する場を作るのは難しいけど、そういうのはガチっと共有できてると思います。

自分一人で抱えてても仕方ないですからね。

(澤田)

最後に、ご自身のこと褒めてください。
皆さんからここで名言をたくさん頂きました。
なので、大トリとして、渾身の「自分褒め」をお願いします。

(ぼけっと河川さん)

ハードル上げるなあ～(笑)。

やっぱり、一番自分で気にしているのが、子供との距離感。

誰よりも打ち解けるのが早いのが自分だと思ってます。

それが男の子でも女の子でも関係なくです。

子供目線になれる能力が高いとか、子供と一緒に立ち位置と
いうのは意識しています。

さっきも言いましたが、相手の子の気持ち汲み取れなくて泣かせてしまったら、同い年の男の子が素直に謝るみたいに
「泣かしちゃってごめんね」って謝るぐらいな感じで一緒にレベルで接して、切り替えてまた一緒に楽しく遊びます。

子供たち同士でそういうのあったら、見ていて微笑ましいでしょ？

そういう感じで、子供たちと、文字どおり「一緒に」なっています。

これセンスだと思います、自分で良いセンスだと思います。



(澤田)

素晴らしい「自分褒め」、感動しました。

今日はお疲れのところありがとうございました。

——取材を終えて (澤田)

今日は本当に、本当に本当に楽しかったです。

みなさん生き生きと、笑顔でお話しして下さるのが印象的で、こちらも自然と笑顔になっていました。

そしてまた、皆さんに失敗エピソードを伺っていたのですが、失敗が少ないというのも驚きでした。

これは、やはりみなさんがとても真剣に、考えてきた結果だと思っています。

失敗も最初からなかったというわけではなく、むしろ最初は失敗だらけだったのかもしれない。

しかし、それをみんな真剣に考え、話し合い、改善して、解決して、失敗を少なくしてきたのだと思います。

そうですね。

「考える」→「考えを伝える」→「考えを共有する」→「一緒に頑張る」

ということなのですね。

河野さんはじめスタッフの皆さんそれぞれに、ぶれない信念が感じられました。

「自立支援と社会参加」

それをさておいたとしても、とにかくみなさん、ぼけっとの中が楽しいんだな、ということがよくわかった取材でした。

放課後等デイサービス「ぼけっと」さんは、開設して1年経過したばかりの、まだ新しい施設です。

今後、どのように発展していくのか、子供たちのためにどんな「ぼけっと」さんになっていくのか、開設をお手伝いさせていただいた者として、これからもずっと拝見していきたいと思っています。

おわり

(文)

行政書士 澤田 郁

(写真・構成)

行政書士 中村道彦

(発行)

澤田かおる行政書士事務所(072-488-7304)